

長野縣方言における

音韻現象の概観

青木千代吉

長野縣方言の音韻分布については、明治二十四、五年頃、諏訪の人武井一郎氏が分布図を作っておられることが、東條操先生によつて紹介されている。(音声の研究第二輯)

私も昭和二十一年から三年間ほど長野縣下各地を臨地調査を試みたのであるが、その結果を整理してみると、武井氏が記していられる五つの音韻現象の分布は大体今日も長野縣方言の音韻上の特色を示していることができる。ただ、その分布範圍や音転訛の度合について、多少の差異の認められるのは六十年という年代のへだたりから来るものが大部分の理由である。

本稿においては、武井氏の記録された音現象はもちろん、その他、広く縣下の音韻現象の主だったものについて、ごく概略の事実だけを記述してみたいと思う。

一 母 音

1 単独母音として現われる母音イは、東信から北信一帯に

かけてエに混同される傾向がある。

えた(板) えま(今) えも(芋) えろ(色) えろ
はのえ(イロハのイ)

これらはほんの一例に過ぎないが、この音転訛の傾向は老人ほど盛んに聞かれるものであるが、現代の教育を受けた人の間にも時として聞かれるもので、かつては相当根強かつたものであることが想像される。

もともと、この現象は裏日本から関東北東部に通じて現われるものであるから、信州の以上の地帯はその系統の中の一部を占めるものであることがうかがわれる。そして、北信でも千曲川に沿うて北に行くほどこの傾向が甚だしくなり、下高井郡の木島、穂高、下水内郡の常盤村、上水内郡の古間、富士里等の村々(第一図の1……8にわたる地帯)の老人では殆んど徹底的に、イ音のエ音転訛が聞かれるのである。

えったい(一体) えつ(何時) えっべ(一杯) ええ
はん(いいかげん) えそあし(忙しい) えくじなし
(いくじなし) えたすら(いたすら) 等々
これらはいずれも語頭音の場合であるが、語尾に現われる二重母音の場合でも、

うんどかえ(運動会)
えたえのしれね(いたいの知れない)
かえかえ(開会)

のように転訛されている。また武井氏の分布図には記されていないが、北安曇郡北部の小谷地方(3536)にもこの傾向があ

つて、ここでもやはり老人ほどその度合の強いことが観察され
た。

また奥信濃地方(12345)においては、単独の母音イ
は、標準音「i」よりは開口の度合がやや広くてその聞えは「i」
音であると認められる。そのために、この地方ではイ音が徹底
的にエ音に混同される結果となったものであろう。ところが、
東信北信一帯では、イ音は大体「i」であるから、すべてのイ音
がエ音に発音されるという訳ではなく、語彙によつては「i」と
正しく発音されるのである。

奥信濃地方においては、イが単独母音としてでなく、他の子
音と結合してキ・ニ・ヒ・ミ・リの音節を作つた場合もやはり
ie ge ne ne re と発音されているのであつて、

ぶ <small>ぶ</small> き	Futsuke	(ほおずき)
に <small>に</small> ひき	netake	(二匹)
ひ <small>ひ</small> るま	geruma	(晝間)
み <small>み</small> ち	meki	(道)
あ <small>あ</small> り	are	(蟻)

のような発音であり、キ・ビの場合もまた、

こ <small>こ</small> ろぎ	koroge	(こおろぎ)
ゆ <small>ゆ</small> ーびん	juben	(郵便)

またこの奥信濃地方では、イ段の音節中、シ・チ・ジの三音
は、その母音の調音域がずつと奥にずれて、中舌音「i」である
と認められる。

いちばん	itiben	(一番)
はちじ	hatidagi	(八時)
しらね	shirane	(知らない)
ちくまがわ	tsukumagawa	(千曲川)
ちず	tsuzu	(地図)

この地方のこうした音韻現象はあきらかに東北系のものであ
ることは後に記す幾つかの現象と全く同じであるが、右の中舌
音が、南信の下伊那、西筑摩地方の老人の発音に聞かれること
は注意すべきことであらうと思われる。

くみ	kumi	(組) 下那、和田(72)
いし	ishi	(石) 西筑、吾妻(56)
かみ	kami	(神) 下那、神原(69)
うち	uchi	(家) 西筑、藪原(48)
つち	tsuchi	(土) 南安、奈川(46)

後に述べることであるがこれら南信地方には今日東北系だと
稱せられる発音が少しく見当たるが、この「i」音の散見するこ
となどもその一例であらう。ただ「i」音が「i」であることは、
奥信濃では聞かれないもので珍らしいものである。

東信、北信地方では、キ・ミ・ヒ・ニ等のイ段の音もケ・メ
・ヘ・ネのエ段の音に転じているのが聞かれる。

め <small>め</small> つける	(見つける)	す <small>す</small> げる	(過ぎる)	へ <small>へ</small> ま	(暇)	
へ <small>へ</small> る	(干る)	ね <small>ね</small> んじん	(人蔘)	え <small>え</small> べ	す <small>す</small> っこ	(恵比壽 講)

・長野縣方言における音韻現象の概観

エ 奥信濃地方においては、母音エが標準音よりも狭い音 [e] であることが多くイとエの中間的な音であることはイが [・e] であったことと似ている。

- くたぼれた kutaboreia (疲れた)
- かなけつち kanake-tjo (とかげ)
- しばのめ jibanome (柴の芽)
- けしね kejine (穀類)

だからこの地方では、兄 (ane) と姉 (ane) の発音上の区別は殆んど不可能になっている。

イをエに転訛している北信地ではエ音をイに転ずることも多いのであるが、次にその一例を挙げてみよう。

- むかいに (迎えに) おいる (終える)
 - はい (灰) しいない (為得ない)
 - いらい (偉い) かいる (蛙)
- これらは単独の母音の場合であるが、テ・メ・レ等の音節も、
 いっちみない (行つてみなさい) 更埴南部
 やうちろ (やってみろ) 〃 〃
 みたとれ (めったとれ) 南佐久
 くだびりた (くだびれた) 上高井

オ 母音オが他の母音ウに転じているものとして、東信北信地方一帯に見られる次の現象が特徴あるものである。

- あすぶ (遊ぶ) かぶちゃ (かぼちゃ)

ふんと (本当) ふるしき (風呂敷)
 ます (燃す) みる (漏る)
 オノウの転訛では上水内、上高井、下水内、下高井の地域が比較的盛んである。これらの地方に特殊に聞かれるものとして次のようなものがある。

- ゆてー (予定) ゆーすの (よその)
- ずーせ (雑炊) しひゅー (四俵)
- おつこ (男) むらう (貰う)

ウ 前項とは逆に母音ウがオに転じている場合もすいぶん多く、まず単独母音の場合では、奥信濃地方に、

- おごえす (鷲) おちわ (うちわ)
- おち (家) おら (裏)
- おしんぼ (牛) おさぎ (兎)
- おす (白) おめすけ (梅漬)

等の発音がある。これらはほんの一例であつて、この地方では全く徹底的だと言つてよい。こうした現象は、母音そのものの性質に起因すると思われるが充分確めてみたい問題である。次は音節中の母音ウがオに転じた場合を記してみよう。

- のれる (ぬれる) てのごえ (手拭)
- のすむ (盗む) のるい (ぬるい)
- あでのり (畔塗り) たのき (狸)

- ム…モ もつ (六つ) もすつけ (むすかゆい)

もこ (婿)
もかし (音)
もぎ (麦)
もこー (向う)

ユ…ヨ ふよ (冬)
よせる (ゆでる)

よつくら (ゆっくり)

およ (お湯) より (百合)

つよ (露) よみ (弓)

よーべな (夕)

ある。この現象に類するものでは、拗音の場合に次のようなものがある。

じょろぐ (十六) じょんさ (巡査)

しじょー (始終) きょーに (急に)

むらじょー (村中) じょーどー (柔道)

ル…ロ ほーたる (螢) のろい (ぬるい)

これらは北信と小谷地方の老人に盛んな現象であつて、武井氏が「北越音・一名犀川音」として書き記されたのは、この中のユ・ム・ヨ・モ転訛と、ヨ・モのユ・ム転訛についてのものである。

二 二重母音

二重母音が、長音化する傾向は長野縣下においても一般的なものであるが、その場合にも種々な相を呈しているもので、これを類別的に記述してみると次のようである。

アイ…A

二重母音「アイ」は

いてー (痛い) あけー (赤い)

ねー (無い) てーげー (大概)

でーこ (大根) にけー (二階)

のみてー (飲みたい) へー (灰)

等に発音されるのが大体の傾向であるが、下伊那の遠山地方(80 81 82)天龍川西岸沿いの神原、豊、且開等の村々(78 79)では、これが「**ae**」音に発音されている。この音は諏訪郡の北山、米沢(47)の村の老人にも聞かれるもので、武井氏の地図に言われている「天龍川音」の分布と大体一致する。しかし今日では、すべてのアイ音が「**ae**」音化するのではなく、どこまでも傾向として認められるものである。

また奥信濃地方(1…5)でこの音が行われているが、ここでは「**e**」音の場合の方が多く聞かれた。

中信地方一帯には「**e**」音化がきわめて盛んで四段動詞のイ音便形も次のように発音されている。

わーた (泣いた) てーた (焚いた)

けーて (書いた) めーて (蒔いて)

せーた (咲いた) へーて (掃いて)

これらは、諏訪から、天龍川沿いに上下伊那にかけて盛んに現われるものであり、東筑から南北安曇にもこの傾向が見受けられるが、東信北信には聞かれないものである。

アエ…B

「帰る、考える、お前、山へ、生えて」等の語に含まれる二重母音「アエ」も一般に〔e〕音化するが、「アイ」が〔æ〕音化した地帯はやはりこの「アエ」も〔æ〕音に発音されているのが注意される。

佐久、諏訪地方においては「洗え、貰え、使え、歌え」等が〔e〕音となつて、この地方の大きな特色となつている。ついでながら、この地方では、上記の四段動詞の終止、連体形が、「わろー(笑う)、つこー(使う)、ちごー(遊ぶ)」と〔o〕に発音されるのもこの地だけに行われるもので特徴的な現象である。恐らく山梨から八ヶ岳の両側にわかれて伝播したものである。

オエ…C

「覚える、聞える」等の語に現われる「オエ」も〔e〕音化するの一般であり、「アイ」の〔æ〕音地帯ではこの「オエ」も〔æ〕音化するのであり、中信一帯では、「どこへ、ここへ」等の連語の場合すら「どけー、こけー」と言うのが注意される。

オイ…D

「白い、黒い、細い、ひどい、哀れっぽい」等に含まれる二重母音「オイ」も〔e〕音化するのが普通であるが、ここで注意したいのは、南信地方(55……82にわたる全地域)では大体原音のままに〔oi〕と発音されるのが普通であつて、信州でも他の地域の者が気をつけて、ていねいに発音する時〔oi〕となるのとは趣を異にしている。

ウイ…E

二重母音「ウイ」は

ぞーせ(雑炊) あつえー(暑い)

ませー(ますい)

のように〔e〕音化されるものと、

さみー(寒い) あちー(暑い)

わりー(悪い) たりー(たるい)

かりー(軽い)

のように〔i〕音化するものと二種類あつて、中北信では盛んに長音化されるのであるが、これも南信においては〔wi〕と発音されて、長音化されることは殆んどないものである。

また下伊那では三州街道に沿つた波合、平谷、根羽(76・77)の村々ではA・B・C・D・Eの二重母音を長音化せずに原音のままに発音するのが注意される。だから、南信でも岐阜、愛知への縣境地帯は、D・Eの二重母音を大体原音のままに発音して長音化することの殆んどない南信(55……82)一帯の中でも二重母音の非長音化の現象から見て徹底的な所であると言えるのである。

母音の無声化

〔i〕〔u〕の母音が無声子音に狭まれる時は無声化するのが信州でも一般であるが、諏訪から上伊那、下伊那全地域にわたつてこの現象が起らないのが注意された。

鏡	kusari	机	tsukue	汽車	kija
足袋	shiken	規則	kisokur	吹く	Fukku

これは相当顯著なもので、この地帯における発音上の特色に数えることができるようである。

鼻母音

母音が鼻音化することは東北方言に著しいことであるが、信州では、文節中尾の力行音が有声化する地方(後掲)では強度な鼻母音が聞かれることがある。

優しい	やさしい	欠壞	kekawai
やだ	yada		
せーやす	sejasu	(言います)	
もくち	mokusa	(蓬)	
こつけに	kotkeni	(こんなに)	
あちこたねー	atukotane:	(心配はない)	
西筑摩、下伊那全域に行われる「まんだ」(未だ)という語などは恐らく右のような鼻母音から更に一步進んだ状態であると考えられようが、これに類するものとしては			
このひとんたちや	(この人たちは)	下伊	(72)
おみんとー	(お前たち)	〃	(〃)
こどもんとー	(子供たち)	〃	(〃)
へんど	(吐物)	〃	(60)
かんど	(籠)	西筑	(48)
とんけ	(手桶)	南安	(46)

等が挙げられる。

四子音

力行、ガ行子音

諏訪、上伊那、下伊那一帯にわたつて、キ音の子音が摩擦音「r」に発音される傾向が顯著である。

行つて来て	ireyite	敷地	shijiki
目的	mokuyeyi	適当	terito
まるべき	aruberi	出来た	deyita

前記のように、この地方は母音の無声化が現われないのであるが、キ音の子音が摩擦音で現われることが多いために、一その傾向を顯著にしている。一方またこの「r」音は脱落しやすい傾向を持っていて、これらの地方では時として、iteite(行つて来て)、kette(出来た)等の発音となっていることがある。

この地方ではク・コ音についても、
無くて: √ naitte, このくれ: √ konouire
そんなこと: √ sonaada

のような発音傾向が認められる。

水内、高井地方一帯には、「k」を「h」に転ずる傾向がある。ふたびれた(披れたの意)のふてー(暖いの意)、ほんとう(この所)、このふんな(このくらい)の意、ろふ六、ふさたくさん(くさたくさん)材料の多い意)これは力行音のすべての音節の(k)が(h)になるのではなく、上記の語彙に現われるにすぎない。

奥信濃地方ではキをチに転訛する傾向がある。

ちのこ(茸)

くわのち(桑の木)

はいちゅう(配給)

この地方ではキ↓チの転訛が甚だしいために、「ちりがぶふかくてちりのちめーね」(霧が深くて桐の木見えね)というような結果にすらなっている。この場合のキ音はこまかに観察すると、 χ である場合もあって、東北における現象と全く同一なものであると認められる。

文節の中、尾に現われるカ行音濁音化の現象は、東北方言に有名なものであるが、信州にもこの現象が各所に行われている。矢島満美氏が信濃教育の昭和十八年、十月号に「木曾方言の性格」という論文を載せられ、西筑摩におけるこの現象を報告されて、旧中山道沿いにこの濁音化の現象が分布することを述べられた。西筑摩における分布については私の調査でも大体同一の結果であるが、これは中山道沿いに分布するのではなく、野麦峠、安房峠、長峰峠を介して、飛騨から安曇、西筑へ広く分布したものであると私は考えたい。この考え方は飛騨と信濃の言語的交渉の調査から結論されたのであるが、その論はともかくとして、この現象は、乗鞍山麓から西筑摩中部にかけて広く、しかも相当まで徹底的に行われるものであることを述べておきたい。

信州北部地方では、上水内郡の富士里、古間村から、下水内郡の永田、柳原、外様、常盤の各村、下高井の木島、穂高村、および以北の地帯(12345678)でも、その土地にだけ

生活している人々の間には殆ど徹底的にこの現象が現われる。

だがい(高い)

かぎ(杓)

おげ(桶)

やぐば(役場)

かごう(囲う)

だいく(大工)

とーぎょー(東京)

よげー(余計)

とんねがら(取れないから)

かがし(桑山子)

いごー(行こう)

これは、北信北部の状態であるが、姫川下流の小谷地方も完全にこの濁音が行われ、人の名ですら、「つねゆぎゃー」(常行は)といった状態である。

上水内郡の西山部地帯(91112)にも、老人の間には時としてこの濁音化の傾向が現われるので、かつては相発に広く分布したものであらうと思われる。

しかし、母音〔i〕の分布といい、また後に記すようにタ行音の有声化の傾向といい、この地帯は、音韻上多分に東北的要素が認められる所である。

奥信濃地方では文節中尾のカ行子音は〔g〕であって、新潟縣の蒲原、魚沼等の地方と同一の音現象を示している。

直ぐ……sugu

あれが……arega

萩……hagi

杉……sugi

鏡……kagami

午後……gogo 禿……hage

千曲川……fikumagawa

ここで、文節中尾のカ行音を有声化する地帯のうち、本来のカ行濁音を〔g〕に発音するのが奥信濃一帯であり、〔g〕音に発音するのがその南に連る一帯の地(678)であるという

ことになる。

ガ行四段活用の動詞「漕ぐ、泳ぐ、仰ぐ、繋ぐ、嗅ぐ、急ぐ、……」等の語が、「で」「だ」に連る場合は信州の内部でも各地域によって特殊な形を示すこと次の通りである。

(1) つない、といて (繋いでおいて) *tunaitoite*

むいた (むいだ=もき取った) *muita*

かいて (嗅いで) *kaite*

かついた (担いだ) *katsuita*

かせいて (稼いで) *kasgte*

はいた (剃いだ) *haita*

これは西筑摩の大部分、下伊那の南半部に聞かれるものである。

(2) ぬんで (脱いで) *numde*

およんどる (泳いで居る) *ojondoru*

さわんだ (騒いだ) *sawanda*

こんで (漕いで) *konde*

あおんだ (仰いだ) *aonda*

これは東信に最も盛んに行われ、中信でも、東筑、松本、安曇一帯にわたって用いられ、南信でも、西筑では(1)の……
iecta (地帯の更に南西部にあたる山口、田立、神坂、吾妻村
(64 66) 等に聞かれるのが注意される。

北信では *numde* (*da*) (脱) *voioide* (*da*) (泳) *toide* (*de*) (研) 等の形であり、下伊那でも北部の生田、大鹿村 (70 71) 等では北信と同じ状態であるから、それ以北の上伊那 諏訪に

かけて同じく *iecta* (*da*) の形が行われているのであろう。(その分布については正確に調査してないので決定的なことは述べられない)

北信地方では、語間の〔g〕音が脱落することが多く聞かれる。

すーに (直ぐに) *su:ni*

いそあし (忙しい) *isogji*

むいめし (麦飯) *muimeji*

せー (せぎ、溝の意) *se:*

ないな (鞭儀な) *naina*

あさえ (朝げ、朝の意) *asae*

これは、下高井郡の穂高(7)、上水内の古間村(8)以北にわたる一帯が最も盛んで、おんがくしつ(音楽室)のように撥音に続く場合を除いては老人においては、殆んど徹底的なものと云える。南信地方でも

あつすいて (暑過ぎて) *atsusuite*

うるい (亮木、地名) *wruui*

はちあつ (八月) *hatsjatsui*

かい (鈎) *kai*

このあつた (このがつた) *konoata*

等のように、この傾向が相当あるが、それは文節中尾のカ行音が有声化する地帯とはば一致している。

形容詞に現われるウ音變形、つまり、クVウの変化は、南信の

西筑の南部、下伊那の中部以南の地に、「よう出いたなあ、よ
ー働いとるなあ、でござなつた、おおきょーなつた」などのよ
うに、言われている。これらのも、「暑うなつた、寒うなつ
た」とは言わないので信州では本当に限られた語について現わ
れるのみである。(その分布は確かめてない。)

力行拗音 下高井、下水内一帯から上水内の西山部地方にか
けて(1234567891112)は次のようにクツ・ヅツ音が
徹底的に行われる。

ぐわいじん(外人)、うぐわい、くわんりょー(完了)、く
わし(菓子)、せつくわい(石灰)、にくわい(二回)、ゆくわ
い(愉快)、けつくわ(結果)、くわっこ(括弧)、くわんけー
(関係)、くわい(會)、りくわ(理科)、くわたな(夥多な)
これは老人に限らず一般に右のような発音となつている点が
注意されることである。

サ行子音

ここでは特別な現象がないが、「それ」という語のソ音に、ホ
音が対応している現象がある。

ほだもんで (それだから)

ほーして (そうして)

ほーじゃ、ほいじゃ (それでは)

ほーけー (そうかい)

ほだけど (それだけども)

ほいでよ (それでさ、そうしてね)

これは諏訪地方に最も盛んであるが、上伊那・西筑等にもこ
の傾向が少しく認められる。

サ行イ音便と言われる現象は関西地方には昔から盛んに行わ
れて来たようであるが、信州では南信地方に用いられている。

けやいて (消して) おろいて (下ろして)

はないた (放した) さいた (挿した)

うついて (写して) はねして (話して)

おとして (落して) のばいて (伸して)

ころばいた (転ばした) 等

これは、あらゆるサ行四段動詞が右の形となるのでないこと
は一般に注意されている所と同じである。この現象の分布は、
55から82にわたる全地域、即ち南安曇の奈川村から西筑摩一帯、
下伊那全部におよび、上伊那でも南部の南向、片桐、飯島等の
村々までこの傾向が認められる。しかし、これらの村々や前記
の奈川村あたりではこの音便の現象が現われる語の数が限られ
て来るようである。つまり「はないて、おとして」等は用いら
れても「うついて、のばいて」等は用いられないというような
状態である。

タ行、タ行子音

文節中尾のタ行音が有声音となる現象は、文節中尾の力行音
の有声化する地帯の中で聞かれるが、後者ほど顯著ではない
し、またそれが聞かれる地域はぐっと縮小している。

いぐどち (行く時) igudochi

ます (松) madzu

まだ (又) mada

ひどき (一月) gidodzugi

はだらき (働き) hadaragi

おじゃ (お茶) odga

おど (音) odo

わだし (私) wadashi

ここんどこ (この所) kokondoko

これは奥信濃の水内、堺村(123)の調査で得たものであるが、西筑摩、下伊那遠山地方等でも、

ふずーに (普通に) fudzu:ni

いじおー (一心) idgio:

せずび (設備) sedzubi

ふだづ (二つ) fudazu

いだ (居た) ida

等が老人の発音の中に聞かれたものである。

次にダ行音とラ行音の混同の現象であるが、(武井氏が木曾

川音として挙げられたもの)これは、南安曇村奈川村(5556)から西筑摩にかけて、「人らちゃ(人たち)、そーしてれすね

(そうしてですな)、そーらから(それだから)、さくだ(櫻)」

等と用いているのを聞いたけれども、そう徹底的なものではなく、今日では、そんな傾向がある程度になつていようである。

西筑摩で、「だちかん」(いけない、埒があかない)とい

う言葉は今日も盛んに用いられるが、これもダとラの混同の形であろう。(下伊那では、ダチカンとラチャカンとの二つの形が用いられている)この傾向はまた奥信濃にもあつて、「くらされ(下さい)、川口水(川口で)、いぐるち(行くどき:行くとき)どこらえ(何処だい)等という発音が聞かれた。つまりこの混同は、信州の南北両端に見られるものである。

ハ行子音

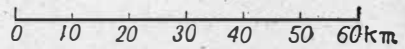
ハ行音ではヒをシと転訛する地域は信州でも比較的広いものであることは武井氏の記された通りである。今日でも、千曲川および犀川沿岸地域に行われるのであるが、中でも、南佐久、長野、上高井、松本などはこの傾向の比較的強い所である。しかし、小縣から更級、埴科三郡の地帯では、殆んどこの混同が聞かれなくなっているのは、武井氏の調査がなされた頃にくらべれば大きな変化であると言える。また、小谷地方でもいくらかこの傾向があり、大町(37)、以南の安曇一帯にかけてやや盛んである。南信では、下伊那の清田路村(74)で「しばししろつた(火箸を拾つた)、しばた(火ばた)、しつかかつた(ひつかかつた)」等の数語が聞かれたが、これもそれ以外の場合はあまり転訛しないようである。

奥信濃の下高井郡堺村に秋山地方と呼ばれる山間の一部落(3)がある。ここは新潟縣、中魚沼郡から中津川という川沿いに七里近くも急峻な山中にわけ入つた場所であつて、昔から独特な風習が行われて来ているといつたので種々紹介されて来たよ

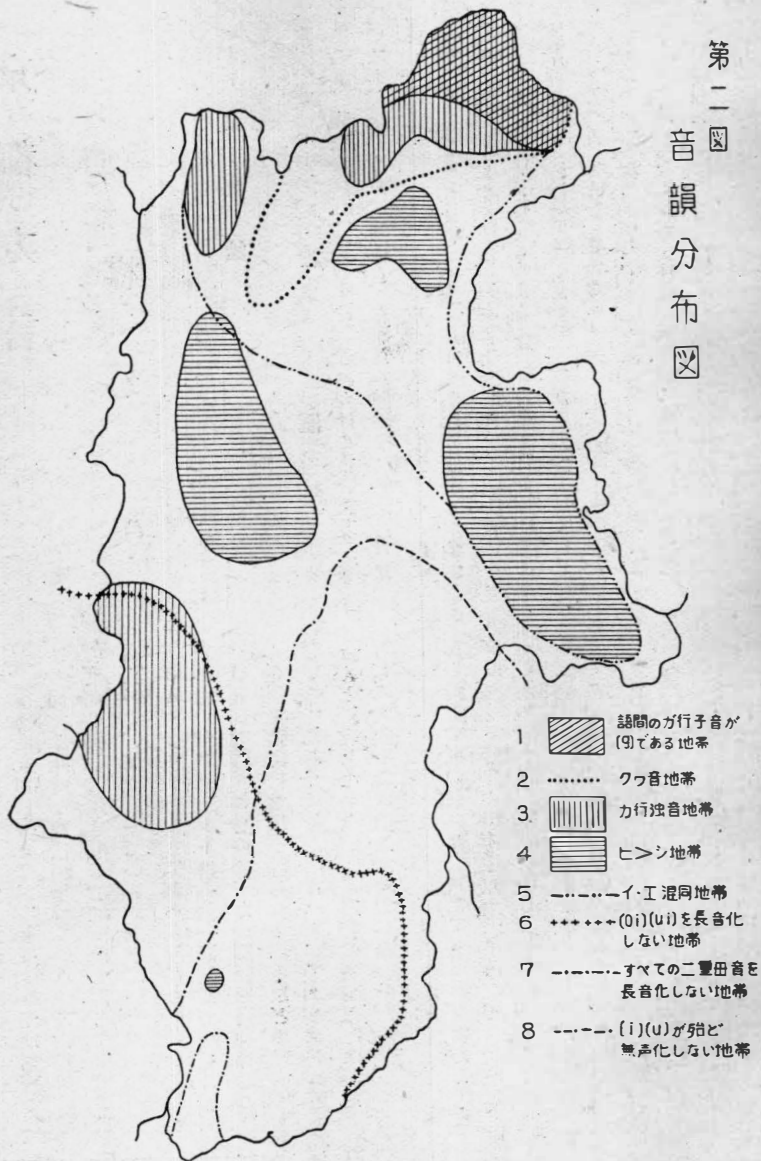
(第一圖)
長野縣地圖



1 : 650,000



第二圖
音韻分布圖



(二三頁より)

- 註1、この表では隣接の二つの地帯がどの現象で異なるかということがはつきりする。(たとえば、北信と東信はどこで違つか、東信と安曇東筑はどこで違つかというように)。
- 2、奥信濃地方(12345)は便宜上北信の中に収めたが、独立した一方言地区として立てる理由は充分にある。